

市内にある弥生時代の 主な遺跡

II

原遺跡

名取川及び増田川によって形成された、標高9m前後の自然堤防上に立地しています。東北本線名取駅の北西1.5kmの地点に位置し、名取市田高字原地内に所在しています。

これまでの調査で、この遺跡からは弥生時代前期～近世にかけての遺構・遺物が発見されています。最近行われた、この遺跡の3つの地点での発掘調査の成果を紹介します。

II-1-①

原遺跡の平成7年度県道改良工事に伴う調査地点

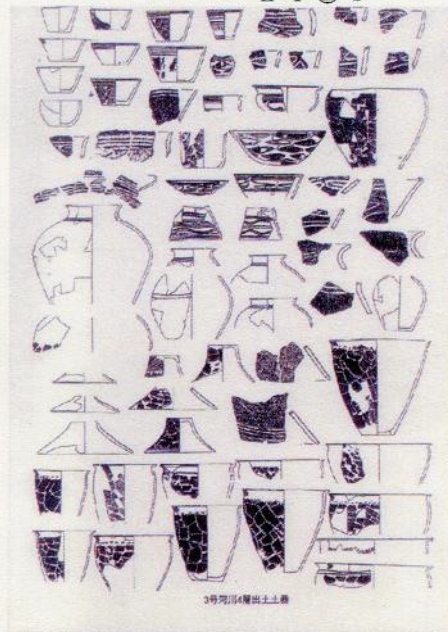
平成7年に行われたこの地点の発掘調査で、最も多く出土した遺物は、弥生前期後半～中期前半の弥生土器で、河川跡から多量に出土しています。多量に出土している状況からみて、隣接している区域に、この時期の集落が発見される可能性が非常に高くなっています。また、稲穂をつみ取る道具である石包丁が出土し、河川跡の弥生土器を出土した層の土に、稲の細胞（プラント・オパール）が含まれていることもわかりました。このような発掘調査や自然科学分析により、この時代に稲作が開始されていたことが確認されています。



II-1-②-b

河川跡で土器などが出土したようす

II-1-②-b



河川跡で見つかった土器の実測図

II-1-②-c

II-1-②-c

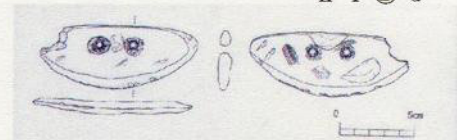


II-1-②-a

石包丁が出土したようす

II-1-②-d

II-1-②-d



石包丁の実測図

II-1-②-e

II-1-②-e

※ プラント・オパールについて

稲の葉には、プラント・オパールと呼ばれるガラス質の細胞が多く含まれています。この細胞は、葉が枯れてなくなっても、化石のように半永久的に土の中に残ります。そこで土の中にプラント・オパールが含まれているかを調べれば、その土ができた時代に稲が生えていたかを知ることができるわけです。

II-1-③-a



II-1-③-b



II-1-③-c



II-1-③-d

プラント・オパール（稲の細胞）の拡大写真

II-1-③-b